

キリシタン学校史の研究 (一)

平 田 宗 史 平 田 トシ子

(1986年9月5日 受理)

はじめに

ザヴィエルの乗った船が、1549年8月15日、鹿児島湾内に、静かに錨をおろした。彼の日本滞在は、僅か、2年有余であったけれども、彼の蒔いたキリスト教の種子は芽を出し、日本の風土に適応し、次第に、大きくなくなっていった。1581年の『日本年報』には、キリシタンの数について、つぎのように報告している。

「本年日本に在るキリシタンの数は、ビジタドールの得た報告によれば15万人内外で、その中には豊後、有馬および土佐 Tosa のキリシタンの王（大友宗麟、有馬晴信、一条兼定）のほかにも、高貴な人で親戚及び家臣と共にキリシタンとなった者が多数ある。キリシタンの大部分は下 Ximo の地方、有馬、大村、平戸 Firando、天草 Amacuça 等に居り、また五島 Goto 及び志岐 Xiqui の地方にもキリシタンが在って、その数は11万5千人に上り、豊後国には1万人、都 Miaco 地方には2万5千人ある。ただし五畿内 Goquinay と称する諸国に在る者及び山口 Yaman-guchi その他の地方に散在する者もこの中に加算してある。キリシタンの在る諸国に大小合せて200の聖堂がある。」⁽¹⁾

1587年、豊臣秀吉が、伴天連追放令を出したのにかかわらず、その後も、キリシタンの数は増加した。キリシタン史研究の泰斗である海老沢有道は、「1590年代にはキリシタンの最盛期を迎えている。統計的にははっきりしないけれども、そのころには30数万には達したものと推定される。当時の日本人口2700万として、総人口に対し、1.3%ほどの信者があったわけである。」⁽²⁾と、推定している。

ところが、秀吉は、キリシタンの弾圧を強化してきた。秀吉の死後、主導権を取り、関が原の戦で政権を得た徳川家康およびその後継者たちは、キリシタンの弾圧を一段と強化した。すなわち、1612年3月、キリスト教を禁じ京都の会堂を毀つ、1613年12月、キリスト教厳禁、伴天連・教徒追放、1614年3月、キリシタン信者の高山右近、内藤如安ら100余人国外追放、1619年8月、京都

のキリスト教徒60余人火刑と、キリシタンの弾圧が推められ、1637年～1638年の島原の乱で、それは極に達した。その後も、キリシタンに対する弾圧は苛酷を極め、キリシタンは潜伏することとなった。

当時、日本に入ってきたキリシタンは、イエズス会（1549年）、フランシスコ会（1593年）、ドミニコ会（1612年）、アウグスチノ会（1602年）の4派であったが、その中でも、最初に布教活動したイエズス会は、教育を特に重視したのであった。先ず、1561年に、教会に附属して初等学校が設置され、キリシタンの全盛時の1583年には、約200の初等学校が設置されていたと言う。さらに、1579年7月来日した巡察師ヴェリニアーノの指導の下に、1580年に、有馬にセミナリヨ、翌年、安土にセミナリヨ、府内にコレジョ、そして臼杵にノビシアードを設立した。しかし、それらの学校も、キリシタン弾圧が激しくなる1600年以降になると、設置場所を転々としなければならなくなり、次第に、姿を消すこととなった。

後述するように、キリシタン学校の実態が、大正以降、キリシタン研究者の手によって、明にされてきた。16～17世紀、学校教育の不毛の時代に組織的に行なわれていたキリシタン学校の全貌が解明されてきた。これまでの日本教育史では、キリシタン学校は、客員として位置づけられてきた傾向が強いが、本研究は、これまで、キリシタン史研究者によって蓄積されたキリシタン学校の研究成果などにに基づき、キリシタン学校の設置時期、施設および設備、組織、教員、教育内容、生徒などを、わが国在来の学校のそれらと比較検討し、キリシタン学校の日本教育史上の意義を究明しようとするものである。

先ず、本稿では、キリシタン学校の先行研究の研究と日本教育（学校）史でのキリシタン学校の取り扱い方を⁽³⁾検討したい。

(一) キリシタン学校の先行研究の研究

キリシタン学校の研究は、日本教育史研究者の手によってでなく、キリシタン史研究者の主導の下に進行してきた。また、進んでいると言っても

過言ではなからう。

既に、欧米諸国との開国へ踏み切っていた明治政府も、キリシタン弾圧は継承した。明治となっても、キリシタン弾圧を行なった。安政の通商条約は、明治5年に満期となるので、明治政府は、条約改正の下交渉をはかるため、明治4年、岩倉具視一行を欧米諸国に派遣した。しかし、行く先々で、キリシタン弾圧を非難され、キリシタン弾圧を行なう野蛮な国とは、対等の条約は結べないと、条約改正を拒絶されたのであった。条約改正を当面の重要な課題と考えていた明治政府は、これまでとってきたキリシタン政策を改正せざるを得なくなった。

したがって、明治政府は、不承不承ながら、キリシタン禁制の高札を撤去した。消極的ながら、キリスト教を認めた政府は、キリスト教の理解を欧米諸国に示すためか、明治11年、フランス人のジャン・クラセによって17世紀末に編纂されたという『日本西教史』を、太政官翻訳係の訳にて出版した。

その書物の第6章および第12章に、キリシタン学校の所在が記されているが、管見によれば、日本人のキリシタン史研究者の中で、キリシタン学校に注目したのは新村出であった。彼は、先ず、「西洋画伝来の起源」(『太陽』第23巻第1号 大正6年)の中で、有馬のセミナリヨ、府内のコレジョ、臼杵のノビシアード、安土のセミナリヨなどについて触れている。そして、彼は、翌年、「安土桃山時代の天主教教育」(『大学及大学生』第3号大正7年1月)という論文を出した。これは、キリシタン学校を正面からとらえたわが国最初の論文である。

次第に、キリシタン史研究が注目されつつあった中で、キリシタン史研究の上で大きな足跡を残した村上直二郎は、大正・昭和の交に、『耶蘇会年報』(大正15年9月)、『耶蘇会日本通信』(昭和2年9月)などの翻訳を出版した。これは、キリシタン研究の基礎資料となり、その後のキリシタン学校研究にも大きな寄与をした。そして、この頃から、日本教育史研究者の中にも、キリシタン学校に注目する者が出てきた。その一人である武田勘治は、「切支丹宗門の弘通とその教化事業」というタイトルで、昭和2年2つの論稿を発表した。しかし、これは、前掲の新村出の論文の域を越えるものではなかった。

キリシタン学校の研究を一段と進展させたのは木下奎太郎(本名太田正雄)の「天正年間耶蘇会諸教育機関の移動」(『思想』第100号 昭和5年9

月)とシリング(Schilling)の『Das Schulwesen der Jesuiten in Japan (1551~1624)』(Druck der Regensbergischen Buchdruckerei, Münster i.w. 1931年)とがある。前者は、ルイス・フロイス(Luis Froes)書翰のイタリア本を通して、1582年から1592年の間のキリシタン学校の移動を考察したものである。後者は、9か国語にわたる断片的な史料を寄木細工の如くして、キリシタン学校の初等教育機関から高等教育機関まで、一応、体系づけたものである。今日からみると、いろいろと問題点があるけれども、キリシタン学校史研究史上、一つの金字塔であった。それが出版されると同時に、キリシタン研究者および日本教育史研究者達は、シリングの著書に注目した⁽⁴⁾。その一人である武田勘治は、シリングの著書に基づき、「本邦に於ける切支丹初等教育」(『教育論叢』第31巻第2号 昭和9年2月)という論稿を発表した。これまでのキリシタン学校研究では、セミナリヨ、コレジョ、ノビシアードなどの中・高等教育機関だけを研究対象としていたのに、これは、初等教育機関に焦点を合わせて紹介した点が評価される。さらに、片岡弥吉は、「邦人パードレ養成事業の管見」(『カトリック研究』第19巻第4号 昭和14年7月)という、これまでのキリシタン学校研究と異なった視点の論文を発表した。

以上のように、キリシタン学校に関する研究が発表され、キリシタン学校の実態が明らかにされた。そういう中で、それまでのキリシタン研究を集大成する『カトリック大辞典 I』(富山房昭和15年11月)が出版されることとなった。その中で、『耶蘇会年報』『耶蘇会日本通信』などを訳した村上直次郎は、「キリシタン学校」、前述のシリングは、「16, 7世紀に於けるイエズス会士教育事業」を執筆し、それまでのキリシタン学校の研究を集大成した。その後、敗戦までのキリシタン学校研究で注目される研究は見当たらないが、前掲の昭和6年に出版されたシリングの著書が、『日本に於ける耶蘇会の学校制度』(東洋堂 昭和18年3月)、『きりしたん文化史』(地平社 昭和19年9月)という書名で、翻訳され、出版された。

戦後になると、戦前、徐々に発展してきたキリシタン学校の研究が、学校種別に、また地域別に、さらに、特殊領域別に、行なわれ、一段と深化した。そして、それは、イエズス会の教育事業が中心となった。

先ず、今村義孝の「16世紀後半に於ける日本耶蘇会布教活動の一形態——主として創始期に於け

るその教育的活動に就て——」(『秋田大学学芸学部研究紀要』第一輯 昭和26年2月)が先鞭をつけた。この論文は、イエズス会の日本での教育活動を三期に時期区分し、その中の第一期を考察したものである。すなわち、セミナリオ、コレジョ

第一期 創始期 (1549～1579)

第二期 隆盛期 (1580～1586)

第三期 衰頹期 (1587～1614)

などの教育機関が設置される以前のイエズス会の教育機関を考察したものであった。その後、表(I)のキリシタン学校研究文献目録を見れば分るように、キリシタン学校研究は急速に進展する。そして、それは、種々の視点から実施された。

一つは、助野健太郎の「日本切支丹初期に於ける邦人傳導者の養成と活躍」(『基督教史学』第一輯昭和26年4月)、「切支丹小学校教育の研究」(『六浦論叢』2 昭和28年8月)、「切支丹傳導士学校の研究」(『基督教史学』第4輯 昭和28年12月)、「キリシタン布教期における教理教育」(『基督教史学』第9輯 昭和34年10月)などの論文のように、各学校を全国的に詳細に検討したものである。

二つは、各地方に設置された学校を検討したものである。例えば、入江潤の「加津佐学林を尋ねて(一)」(『基督教史学会会報』第25号 昭和30年12月)「加津佐学林を尋ねて(二)」(『基督教史学会会報』第26号 昭和31年1月)、今村義孝の「天草学林の位置について」(キリシタン文化研究会『会報』復刊第3年第4号 昭和35年3月)、Arcadio Schwadeの「府内のコレジョについて」(『キリシタン研究』第10輯 昭和40年3月)、H・チースリクの「日本における最初の神学校 (1601年～1614年)」(『キリシタン研究』第10輯 昭和40年3月)、「高槻のセミナリオ」(『キリシタン文化研究会会報』昭和49年6月)、「臼杵の修練院」(『キリシタン研究』第18輯 昭和53年2月)、片岡千鶴子『八良尾のセミナリオ』(キリシタン文化研究会 昭和44年12月) 鶴田文史編の『天草学林一論考と資料集一』(昭和52年10月)、三俣俊二の『安土セミナリオ』(昭和55年5月)、結城了悟の「有馬のセミナリオ—1595年～1614年—」(『キリシタン研究』第21輯 昭和56年10月)などであった。これらの中には、探訪記的なものもあれば、片岡千鶴子の論文のように、「八良尾のセミナリオ」の教育活動を、未発表の資料を駆使して、詳細に検討したものもある。

三つは、フーベルト・チースリクの「キリシタンの学校におけるヒューマンズム」(上智大学編『大学とヒューマンズム』昭和28年2月)、「セミ

ナリオの教育精神について」(キリシタン文化研究会『会報』第8年第1号 昭和39年6月)坂元絢子の「キリシタン時代の教育理念について」(キリシタン文化研究会『会報』第13年第1号 昭和45年6月)などの論文のように、キリシタン時代のイエズス会教育の教育精神を考察したものである。

四つは、H・チースリクの「セミナリオの教師たち」(『キリシタン研究』第11輯 昭和41年3月)、柳谷武夫の「セミナリオの生徒たち」(『キリシタン研究』第11輯 昭和41年3月)などの論文のように、セミナリオの教師および生徒を考察したものである。

五つは、土井忠生の「貴理師端往来について」(『キリシタン研究』第5輯 昭和34年6月)尾原悟の「キリシタン時代の科学思想—ペトロ・ゴメス著『天球論の研究』—」(『キリシタン研究』第10輯 昭和40年3月)、井手勝美の「キリシタン時代に於ける日本人のキリスト教受容—キリスト教書籍を中心として—」(『キリシタン研究』第11輯 昭和41年3月)などの論文のように、キリシタン学林で使用された教科書を考察したものである。

六つは、ローペスニガイ師の「キリシタン音楽—日本洋楽史序説—」(『キリシタン研究』第16輯 昭和51年7月)、海老沢有道の「第5章セミナリオの音楽とオルガン伝来」(『洋楽伝来史』日本基督教団出版局 昭和58年2月)、「日本文化史上の天主教説—医学・天文学を中心として—」(前掲『大学とヒューマンズム』)などの論文のように、特定の教科を深く考察したものである。

七つは、岡本良知の「天正年間に於ける豊後耶蘇会学校の建築様式」(『別府大学紀要』第6輯 昭和30年12月)、片岡弥吉の「イエズス会教育機関の移動と遺跡」(『キリシタン研究』第11輯 昭和41年3月)などの論文のように、ある特定領域からキリシタン学校を詳細に考察したものである。

八つは、海老沢有道が、『南蛮学統の研究』、『南蛮文化』などの著書の一部、および多賀秋五郎編著の『近世東アジア教育史研究』中での分担執筆で、品川勝郎は、「キリシタン学校」(『聖心の使徒』第14巻第5号 昭和41年5月)、H・チースリクは、「キリシタン学校」(『六甲』第18号 昭和43年2月)、松田毅一は、「キリシタン学校」(相賀徹夫編著『探訪大航海時代の日本』小学館 昭和54年1月)で、キリシタン学校について概説的に論じたものである。

表(一) キリシタン学校の文献一覧

	編 著 者	著 書 ・ 論 文 名 (誌名および書名)
1	新 村 出	「西洋画伝来の起源」(『太陽』第23巻第1号)
2	新 村 出	「安土桃山時代の天主教教育」(『大学及大学生』第3号)
3	村 上 直 次 郎 訳	『耶蘇会年報』(長崎叢書)
4	村 上 直 次 郎 訳	『耶蘇会士日本通信』上・下巻(異国叢書)
5	武 田 勘 治	「切支丹宗門の弘通とその教化事業(一)」(『教育学术界』第56巻第1号)
6	武 田 勘 治	「切支丹宗門の弘通とその教化事業(二)」(『教育学术界』第56巻第3号)
7	木 下 本 太 郎 (太田正雄)	「天正年間耶蘇会諸教育機関の移動」(『思想』第100号)
8	P.Dorotheus Schilling O.F.M	Das Schulwesen der Jesuiten in Japan (1551~1614)
9	武 田 完 二 (勘治)	「本邦に於ける切支丹初等教育」(『教育論叢』第31巻第2号)
10	村 上 直 次 郎 訳	『耶蘇会士日本通信(豊後編)』上・下巻(続異国叢書)
11	片 岡 弥 吉	「邦人パードレ養成事業の管見」(『カトリック研究』第19巻第4号)
12	村 上 直 次 郎 シ リ ン グ	(1)「キリシタン学校」 (2)「16・7世紀に於けるイエズス会士の教育事業」 (上智大学編『カトリック大辞典I』)
13	新 村 出	「第二章第一節吉利支丹の教育事業」(『日本吉利支丹文化史』)
14	村 上 直 次 郎 訳	『耶蘇会の日本年報』(第1輯) 『 “ ” 』(第2輯)
15	シ リ ン グ 著 岡 本 良 知 訳	『日本に於ける耶蘇会の学校制度』
16	外 山 卯 三 郎 編	『きりしたん文化史』
17	今 村 義 孝	「16世紀後半に於ける日本耶蘇会布教活動の一形態 ―主として創始期に於けるその教育的活動に就て―」(『秋田大学文学部研究紀要』第1輯)
18	助 野 健 太 郎	「日本切支丹初期に於ける邦人傳道者の養成と活躍」(『基督教史学』第1輯)
19	フーベルト・ チースリク	「キリシタンの学校におけるヒューマニズム」(上智大学編『大学とヒューマニズム』)
20	海 老 沢 有 道	「日本文化史上の天主教学統一医学・天文学を中心として」(上智大学編『大学とヒューマニズム』)
21	助 野 健 太 郎	「切支丹小学校教育の研究」(『六浦論叢』2)

発 行 所	発 行 年 月 日	備 考
	大正 6 年	『新村出選集』南蛮篇乾（甲鳥書林 昭和18年）に転載。
	大正 7 年 1 月	新村出著『南蛮広記』（岩波書店 大正14年18～40頁）に転載。
長 崎 市 役 所	大正 15 年 9 月	
駿 南 社	昭和 2 年 5 月 1 日(上) 3 年 3 月 29 日(下)	昭和41年，雄松堂から改訂復刻。さらに，昭和43年12月，上巻，翌44年2月下巻が，雄松堂より復刻。
大 日 本 学 術 会	昭和 2 年 10 月 1 日	
“	昭和 2 年 12 月 1 日	
岩 波 書 店	昭和 5 年 9 月 1 日	国民学術協会編『日本吉利支丹史鈔』（国民学術選書8）中央公論社 昭和18年10月25日 200～226頁）に転載。
Druck der Regensbergischen Buchdruckerei	1931年（昭和 6 年）	
文 教 書 院	昭和 9 年 2 月 2 日	
帝国教育会出版部	昭和 11 年 5 月(上) 11 年 9 月(下)	
岩 波 書 店	昭和 14 年 7 月 15 日	
富 山 房	昭和 15 年 11 月 25 日	
地 人 書 館	昭和 11 年 5 月 20 日	
拓 文 堂 拓 文 堂	昭和 15 年 1 月 18 日 19 年 2 月 27 日	
東 洋 堂	昭和 18 年 3 月 5 日	
地 平 社	昭和 19 年 9 月 20 日	
秋 田 大 学	昭和 26 年 2 月 25 日	
基 督 教 史 学 会	昭和 26 年 4 月 1 日	
創 文 社	昭和 28 年 2 月 1 日	
創 文 社	昭和 28 年 2 月 1 日	
	昭和 28 年 8 月	

22	助 野 健 太 郎	「切支丹傳道士学校の研究」(『基督教史学』第4輯)
23	岡 本 良 知	「天正年間に於ける豊後耶蘇会学校の建築様式」(『別府大学紀要』第6輯)
24	入 江 滑	「加津佐学林を尋ねて(一)」(『基督教史学会会報』第25号)
25	入 江 滑	「加津佐学林を尋ねて(二)」(『基督教史学会会報』第26号)
26	海老沢 有 道	「序篇 IIIゼズス会の教育」 「前篇 第1章IVゼズス会学校の成果」(『南蛮学統の研究』)
27	海老沢 有 道	「本篇 五 キリシタンの教育事業」(『南蛮文化』)
28	土 井 忠 生	「貴理師端往来について」(『キリシタン研究』第5輯)
29	助 野 健 太 郎	「キリシタン布教期における教理教育」(『基督教史学』第9輯)
30	今 林 義 孝	「天草学林の位置について」(『会報』復刊第3年第4号)
31	フーベルト・ チースリック	「セミナリオの教育精神について」(『会報』第8年第1号)
33	Hubert Cieslik S.J.	「日本における最初の神学校」(1601年～1614年)(『キリシタン研究』第10輯)
33	Arcadio Schwade S.J.	「府内のコレジョについて」(『キリシタン研究』第10輯)
34	尾 原 悟	「キリシタン時代の科学思想—ペトロ・ゴメス著「天球論の研究」(『キリシタン研究』第10輯)
35	片 岡 弥 吉	「イエズス会教育機関の移動と遺跡」(『キリシタン研究』第11輯)
36	Hubert Cieslik S.J.	「セミナリオの教師たち」(『キリシタン研究』第11輯)
37	柳 谷 武 夫	「セミナリオの生徒たち」(『キリシタン研究』第11輯)
38	井 手 勝 美	「キリシタン時代に於ける日本人のキリスト教受容—キリスト教書籍を中心として—」(『キリシタン研究』第11輯)
39	品 川 勝 郎	「キリシタン学校」(『聖心の使徒』第14巻第5号)
40	H・チースリック	「キリシタン学校」(『六甲』第18号)
41	村 上 直 次 郎 訳 柳 沢 武 夫 編	『イエズス会士日本通信』上 (新異国叢書1) 『イエズス会士日本通信』下 (" 2)
42	村 上 直 次 郎 訳 柳 沢 武 夫 編	『イエズス会士日本年報』上 (" 3) 『イエズス会士日本年報』下 (" 4)
43	片 岡 千 鶴 子	『八良尾のセミナリオ』

基督教史学会	昭和 28年12月5日	
別府大学	昭和 30年12月31日	
基督教史学会	昭和 30年12月	
基督教史学会	昭和 31年1月1日	
創文社	昭和 32年2月15日	
至文堂	昭和 33年5月30日	
吉川弘文館	昭和 34年6月15日	
基督教史学会	昭和 34年10月10日	
キリシタン文化研究会	昭和 35年3月	
キリシタン文化研究会	昭和 39年6月30日	
吉川弘文館	昭和 40年3月17日	
吉川弘文館	昭和 40年3月17日	
吉川弘文館	昭和 40年3月17日	
吉川弘文館	昭和 41年3月20日	
吉川弘文館	昭和 41年3月20日	
吉川弘文館	昭和 41年3月20日	
吉川弘文館	昭和 41年3月20日	
日本祈禱の使徒会	昭和 41年5月1日	
六甲学院	昭和 43年2月15日	
雄松堂	昭和 43年12月10日 44年2月10日	
〃	44年5月20日 44年11月30日	
キリシタン文化研究会	昭和 44年12月10日	昭和45年6月10、『キリシタン文化研究シリーズ』(3)として再版。

44	海 老 沢 有 道	「第一章天主教傳來とその教育活動」(多賀秋五郎編著『近世東アジア教育史研究』)
45	坂 元 絢 子	「キリシタン時代の教育理念について」(『会報』第13年第1号)
46	H・チースリク	「高槻のセミナリヨ」(『会報』第16年第3・4号)
47	Jesu's López Gay, S.J.	「キリシタン音楽—日本洋楽史序説—」(『キリシタン研究』第16輯)
48	鶴 田 文 史 編	『天草学林—論考と資料集—』
49	Cieslik, Hubert S.J.	「臼杵の修練院」(『キリシタン研究』第18輯)
50	松 田 毅 一	「キリシタン学林」(相賀徹夫編著『探訪大航海時代の日本Ⅷ受容と分析』)
51	三 俣 俊 二	『安土セミナリヨ』
52	結 城 了 悟	「有馬のセミナリヨ 1595年～1614年」(『キリシタン研究』第21輯)
53	海 老 沢 有 道	「第5章セミナリヨの音楽とオルガン伝来」(『洋楽伝来史』)
54	純心女子短期大学 長崎地方文化史研究所編	『長崎のコレジョ』

表(二) キリシタン学校を紹介した『日本教育史』一覧

	編 著 者	書 名
1	吉 田 熊 次 著	『本邦教育史概説』 目黒書店 大正11年4月20日(初版)
2	高 橋 俊 乗 著	『日本教育史』 教育研究会 大正12年3月18日(初版)
3	高 橋 俊 乗 著	『増訂 日本教育史』 改訂版 教育研究会 昭和4年9月4日
4	安 達 久 共著 吉 原 藤 川	『日本 西洋 系統的東洋教育史』 啓文社 昭和6年3月15日(初版) 9年2月10日(5版)
5	辻 幸三郎 著	『大日本教育通史』 目黒書店 昭和8年5月10日(初版) 15年3月25日(5版)
6	高 橋 俊 乗 著	『日本教育文化史』 同文書院 昭和8年9月10日(初版)

学術書出版会	昭和 45年3月30日	
キリシタン文化研究会	昭和 45年6月30日	
キリシタン文化研究会	昭和 49年6月20日	
吉川弘文館	昭和 51年7月1日	
天草文化出版社	昭和 52年10月1日	
吉川弘文館	昭和 53年2月20日	
小学館	昭和 54年1月10日	
カトリック滋賀県連合会	昭和 55年5月25日	
吉川弘文館	昭和 56年10月10日	
日本基督教団出版局	昭和 58年2月23日	
純心女子短期大学	昭和 60年3月30日	

	備 考
第6章 鎌倉室町時代の教育 (86～127頁) 基督教の学校 (122頁～)―学校教僧所 (123頁)―安土の天主教学校 (125頁)―我が国西洋の学校の初め (126～127頁)	4版(大正13年5月5日), 10版(昭和8年5月5日) において、内容に修正なし。
第7章 江戸時代の教育 (191～382頁) 第3節 天主教と教育事業 (201～204頁)	3版(大正14年5月1日) においては、内容は同じ。 増訂改版(昭和4年9月8日)では改訂。
第7章 江戸時代の教育 (181～380頁) 第3節 天主教と教育事業 (191～194頁)	
第3篇 日本教育史 (409～5) 第3章 鎌倉・室町時代の教育 (434～443頁) 第2節 寺院教育及び学校教育 (439～443頁) 3. 基督教の学校 (441～442頁)	
第1編 古代並に中世の教育 (1～71頁) 第7章 室町時代並に織豊時代の教育 (51～71頁)	
第18章 中世末期地方の文運 (317～350頁) 天主教と教育 (346～348頁) 天主教の末路 (348～349頁)	

7	武 田 勘 治 著	『日本教育史』 日本教育学会 昭和9年4月10日（初版）
8	乙 竹 岩 造 著	『日本教育新教科書』 近世教育史 培風館 昭和12年4月28日（初版） 12年12月28日（訂正再版）
9	海 後 宗 臣 伏 見 猛 弥 共著 渡 平 辺 益 誠 徳	『日本教育史』 目黒書店 昭和13年11月25日
10	乙 竹 岩 造 著	『日本国民教育史』 目黒書店 昭和15年9月30日（初版） 18年2月20日（6版）
11	伏 見 猛 弥 著	『綜合日本教育史』 明治図書 昭和26年6月10日
12	唐 沢 富 太 郎 著	『日本教育史』 誠文堂新光社 昭和28年4月30日
13	赤 堀 孝 著	『日本教育史』 国土社 昭和35年1月20日
14	石 川 謙 著	『日本学校史の研究』 小学館 昭和35年5月25日
15	尾 形 裕 康 著	『日本教育通史』 早稲田大学出版部 昭和35年7月15日
16	長 田 新 監修	『日本教育史』（教育学テキスト講座第3巻） 御茶の水書店 昭和36年5月20日
17	梅 根 悟 監修	『日本教育史Ⅰ』（世界教育史大系Ⅰ） 講談社 昭和51年1月20日

九つは、イエズス会日本年報、イエズス会士日本通信など、キリシタン学校研究に欠くことの出来ない史料が発掘され、翻訳されて、出版されたことである。最近でも、1598年から1614年までのイエズス会年報を集録した『長崎のコレジョ』（純心女子短期大学長崎地方文化研究所編 昭和60年3月）が出版された。

以上のように、キリシタン史研究者の手によるキリシタン学校の研究は、戦後あらゆる側面からなされ、深められた。

（二）『日本教育史』の中での キリシタン学校

前述のように、キリシタン学校の研究が進展し

てきたのであるが、つぎに、キリシタン学校が、『日本教育史』の中で、どのように位置づけられてきたかを考察してみよう。

文部省は、明治10年8月、『日本教育史略』を発行した。その序で、「欧米各国皆教育ノ史有リテ我カ邦ハ未コレ有ラスコレ有ルコト此ノ編ヨリ肇マル」と記されているように、この書物が、日本教育史を著したわが国最初の書物であった。この書物は、米国独立100年を記念して1876（明治9）年に開催されたフィラデルフィア博覧会に出品するために書かれたものであるが、キリシタン学校については、一言も触れていない。佐藤誠実著の『日本教育史』（上巻 明治23年、下巻 明治24年）でも、キリシタン学校についての記述はない。当時、教育界で令名の高かった能勢栄が著し

第1編 江戸時代以前 (1～92頁) 第3章 鎌倉・室町時代の教育 (56～92頁) 4 天主教の教育 (90～90頁)	
第3編 本邦維新以前の教育の概要 (92～258頁) 第6章 安土・桃山時代の教育 (133～137頁) 西洋文化の輸入 (137頁)	
第3編 中世 (79～121頁) 第3章 教育の施設 (99～106頁)	
第2編 中世の教育 (107～198頁) 第2章 室町時代・伏見桃山時代の教育 (146～176頁) 第4節 海外発展及び西洋文化の輸入と教育 (172～176頁)	
第3篇 中世武家の教育 (127～195頁) 第5章 教育施設 (156～192頁) 切支丹の学校 (162～163頁)	
第4章 近代の教育 (191～299頁) 5 日本の近代化と教育 (237～247頁) キリスト教と日本の近代化 (243～244頁)	
第3章 封建国家と教育 (65～94頁) 第3節 室町および戦国の時代相と教育 (76～82頁)	
中世の学校 (83～165頁) 8 キリシタンの学校 [学問と文字との開放性] (152～165頁)	
第2編 日本文化自覚の教育時代 (49～164頁) 第2章 室町時代の教育 (106～125頁) 天主教の学校 (110～120頁)	
第2章 鎌倉・吉野・室町時代の教育 (29～62頁) 第3節 室町時代の教育 (45～62頁) 4 天主教学校 (54～56頁)	第3章は尾形裕康執筆担当。
第2章 中世武家社会の成立と教育 (42～103頁) 第2節 教育施設 (45～65頁) (2) 足利学校・キリシタン学校 (55～65頁)	第2章石川松太郎執筆担当。

た『内外教育史』(金港堂 明治26年11月)は、その緒論で、つぎのような理由で、キリシタン学校について記述しなかったと言う。

「此の書は、我が邦の教育の沿革を論述せるものなれば、我が邦の事実を基礎とし、之に支那、印度及び欧米の事実を其の渡来の年代に由りて挿録したるものなり。而して外国の教育史は、多く我が邦に影響を及したる者、即現今我が邦に行はるゝ教育の理論及び方法を組織せる元素たる者を採録せり。故に支那に於ては、清朝の教育史、西洋に於てはジュスイット派の教育法、スタルム氏及びフェュロン氏の説の如きは記載せず、是毫も我が邦に関係なければなり。」(4頁)

すなわち、能勢栄によると、キリシタン学校は、

わが国に、全然関係ないので、著書で記述しなかったと言う。当時、キリシタン史研究者も、キリシタン学校に関心がなかったので、日本教育史研究者も、キリシタン学校の日本教育史上の重要性に気付いていなかった。これは、能勢栄だけでなく、その後、明治時代に出版された日本教育史のどの書物も、キリシタン学校は登場しない⁽⁵⁾。

キリシタン学校が、日本教育史の書物に登場するようになるのは、キリシタン史研究者によってキリシタン学校研究成果が公表されて数年後である。その最初の書物となったのは、大正11年4月20日発行の吉田熊次著『本邦教育史概説』であった。その著書の「前篇 明治以前に於ける教育の発達」の「第6章 鎌倉室町時代の教育」の中で「基督教の学校——学校教僧所——安土の天主教

学校(125)——我が国西洋の学校の初め」という項目を設け、キリシタン学校について5頁にわたって触れている。ただし、この書物は、前掲のフランスのイエズス会士クラセの著書で、明治11年、太政官翻訳係によって翻訳された『日本西教史』を唯一の資料として書かれたものである。したがって、その記述は、有馬、府内、臼杵、安土のキリシタン学校の所在について少し触れただけで、「最後に足利時代の末に基督教天主教の輸入と共に、基督教の学校も起り掛けたと云ふ」(122頁)「此外信長も安土に天主教の学校を建てることを許したやうに思はれる。」(125頁)という文章表現から窺われるように、自信のない表現がなされている。これは、前節で検討した当時のキリシタン研究の第一人者である新村出の「西洋画伝来の起源」、「安土桃山時代の天主教教育」などの論文の公表を知らなかったことによるのであろうか。それにしても、吉田熊次は、日本教育通史の中で、キリシタン学校について触れた先駆者であった。

吉田の著書が出版された1年足らず後の大正12年3月18日に出版された高橋俊乗著の『日本教育史』の中でも、キリシタン学校が取り上げられている。第7章の「江戸時代の教育」の「第3節 天主教と教育事業」で、キリシタン学校について書かれている。この著書の記述の仕方の特徴はつぎの点にある。

一つは、キリシタン学校が、江戸時代の教育の中に、位置づけられていることである。この点は、他の書物と大いに異なる点である。

二つは、吉田熊次が、『日本西教史』を唯一の資料として記述したのに対し、高橋は、キリシタン研究者の新村出の研究成果を踏まえて記述していることである。例えば、「信長の晩年(天主教傳來後三十年)には既に寺院が二百、信徒が十五萬人に達したといふことである。」(202頁)「大友氏の領内豊後の臼杵には外国人たる宣教師に日本語その他必要な知識を授ける僧学校(Casa Professa)が建てられ、同国府内に宣教師に高等なる教育を施す学校(Collegio)が設けられる外、信者の少年に基督教的教育を授ける学院(Seminarium)が肥前の有馬、豊後の府内、近江の安土等に設けられた。安土の学院は天正九年に建てられたもので、当時は二十五人の身分の良い少年を収容し宗旨の初歩、拉典語、葡萄牙語、日本語の読書作文を授けた。」(202頁)と。(6)

その後、日本教育史の書物の中で、キリシタン学校を取り上げる書物が多くなった。しかし、そ

れらは、高橋俊乗の『日本教育史』の域を出るものではなかった。高橋は、昭和8年9月10日、新しく、『日本教育文化史』を出版したが、その書物の中で、やはり、キリシタン学校について触れている。ところが、それは、前著と、つぎの点で異なる。

一つは、『日本教育文化史』では、キリシタン学校は、「第18章 中世末期地方の文運」というところで記述されていることから分るように、前著では、キリシタン学校が江戸時代の教育の中で取り扱われていたのに、後著では、中世末期で取り扱われているところである。

二つは、表(一)を見れば分るように、次第に進んできたキリシタン研究者のキリシタン学校研究の成果、その中でも、木下奎太郎の「天正年間耶蘇会諸教育機関の移動」(『思想』第100号)という論文を参照し、キリシタン学校についての記述が、より詳細となったことである。

前節で考察したように、教育学研究者の中で、キリシタン学校の重要性について、吉田、高橋などと同じように気づき、昭和の初期にキリシタン学校について教育雑誌に紹介した武田勘治は、昭和9年4月10日、『日本教育史』を出版した。キリシタン学校の記述において、これまでの日本教育史の本と異なる点は、つぎの点であった。それは、「天主教(殆んどジュスイット)の日本に於ける教育については、従来資料がない為に殆んど研究されてゐなかった。そして、その真相が分らない為に『大して教育史上関係がない』とあっさり片付けられてゐたが、近年ドイツの東洋学者ドロトイス・シリंक氏が非常な苦心で闡明してやゝ分明になった。しかしそれは、まだ吾が国では紹介されて居ない。恐らく私が『教育論叢』の本年二月号以下にその一部『切支丹初等教育』を紹介したのが初めであろう。」(90頁)と、著者が、著書の中で語っているように、昭和6年に出版されたシリंक氏のキリシタン学校の研究成果を参考にして書かれたことである。すなわち、これまでの日本教育の書物では、セミナーヨ、コレジョなどのような中・高等教育機関にしか触れてなかったのが、この本では、それらが設立される以前の初等教育機関および慈善の事業、医学教育などまで記述していることである。

以上のように、キリシタン学校研究が進展するにつれて、キリシタン学校は、日本教育史上、重要な項目(もの)となった。したがって、わが国最初の体系的、総合的な教育学の辞典である昭和11年5月30日出版の『教育学辞典』(岩波書店)で

も、「吉利支丹学校」という項目が設けられた。それは、キリシタン研究者の第一人者である新村出が、内外の諸文献および研究成果に基づき、執筆したもので、精密である。(7)

その後、出版された日本教育史の本において、キリシタン学校について触れないものは殆んどなくなった。しかし、それらは、前掲の武田勘治の著書が出版される以前の書物と変りなかった。言葉を換えると、キリシタン研究者によって進展してきたキリシタン学校研究の成果を積極的に取り入れようとする姿勢さえ窺えなかったのである。

前述したように、戦後、キリシタン史研究の進展とともに、キリシタン学校の研究は、一段と深化し、発展した。しかしながら、戦後出版された日本教育史にしても、日本教育史上でのキリシタン学校の取り扱い、武田勘治の『日本教育史』が出版される以前と変りなかった。例えば、伏見猛弥の『総合日本教育史』では、中世武家の教育施設として、「切支丹学校」が取り上げられ、それは、昭和12年3月28日に出版された国民精神文化研究所編『日本教育史資料書』（第2輯）に収録された『日本西教史』、『フロイス書翰』を利用して書かれたものに過ぎなかった。日本教育史の名著の一つと言われ、多くの読者を得たと言われる昭和28年4月30日出版の唐沢富太郎著『日本教育史』にいたっては、「キリスト教と日本の近代化」については触れているけれども、キリシタン学校については一言も触れていない。これは、「教育史をあくまで人間像の展開から考察して」（29頁）みようとする著者の日本教育史を観る視点からきているのであろうか。

他の日本教育史の書物も、伏見の著書と変わらないが、昭和35年5月25日に出版された石川謙著の『日本学校史の研究』は、日本教育史およびキリシタン学校史研究上、画期的な意味をもつものとなった。この著者は、永年、蓄積してきた日本教育史の知見の下に、キリシタン学校を日本学校史上に位置づけようとした。すなわち、彼は、戦前、戦後にかけてキリシタン史研究者によって積み上げられたキリシタン学校の主な研究成果を詳細に検討し、それを日本学校史の中に位置づけるとともに、中世日本学校の特徴までも究明しようとしたものである。そして、彼は、結論的に、つぎのように記述している。

「これまで見てきたところをまとめて考えると、初等学校に60人、70人の通学者のあったという記録といい、セミナリヨ、コレジヨに付設した塾（寄宿舎）における生活様式や日課の立

て方といい、またそれらヤソ会の学校教育に用いた教科書といい、わが在来の寺院における世俗教育と比較して、差異のいちじるしい点もあるにはあるが、むしろ相似点、共通点の多かったことに驚く。そうしてそれ故に、ヤソ会学校の実態をつきとめることによって、うすもやに包まれてぼんやりしていた日本中世学校史のいろいろの点が、はっきりして来るのではないかと期待される。それと同時にキリシタン学校の構造や活動を、わが中世学校史の、客員ならぬ家族の一員として編みこむこともできるであろう、ということも期待される。」（165頁）

石川の著書と同じ頃に出版された尾形裕康の『日本教育通史』も、キリシタン学校研究成果をよく検討し、キリシタン学校に、これまでの日本教育史の書物以上に、紙数を費しているが、前掲の石川謙の著書に比べると、キリシタン学校の日本教育史上の位置づけが明確でない。石川謙の言葉を借りると、キリシタン学校を日本教育史上の客員として位置づけている嫌いがある。

その後出版された日本教育史の書物の中で、キリシタン学校の記述において注目すべきものは、昭和51年1月出版の梅根悟監修の『日本教育史Ⅰ』がある。キリシタン学校の部分を執筆担当した石川松太郎は、キリシタン学校の中での初等学校と、そこで使用されたキリシタン往来に注目している。その点が、注目されるのである。

おわりに

第一節で、キリシタン学校の先行研究の研究を行ない、第二節で、『日本教育史』の中でのキリシタン学校の紹介を考察してきた。これらをまとめると、つぎのようになるであろう。

一つは、キリシタン学校の研究は、キリシタン史研究者の手によって始められ、進展してきたことである。

二つは、キリシタン学校の研究は、大正時代、新村出によって着手され、村上直次郎の『耶蘇会年報』および『耶蘇会士日本通信』などの翻訳などによって徐々に進展し、シリングの研究によって、キリシタン学校の概略が明らかとなったが、戦後、昭和20年代後半から、各方面から研究され一段と深化したことである。

三つは、日本教育史研究者は、キリシタン史研究者によって蓄積されたキリシタン学校の研究成果を積極的に検討し、それを取り入れようとする姿勢が、戦前は高橋俊乗、武田勘治、戦後は、石

川謙を除いて、殆んどないことである。

四つは、管見によれば、石川謙を除いてキリシタン史研究者にしても、日本教育史研究者にしても、キリシタン学校と在来の学校とを比較検討し、16, 17世紀のわが国の学校を総合的に検討したものがないことである。

附記

本研究は、科学研究費一般研究C課題番号59510127と60510134（代表者 平田宗史）によって行なわれた研究の一部である。本稿作成にあたって、純心女子短期大学教授片岡千鶴子先生と同大学附属図書館の職員の方々に、大変お世話になった。謝意を表します。

注

- (1) 村上直次郎訳・柳谷武夫編『イエズス会日本年報 上』（新異国叢書 3）雄松堂書店 昭和44年5月20日 33～34頁。
- (2) 海老沢有道著『日本キリシタン史』塙書房 昭和56年6月30日（7刷）146～147頁。
- (3) 戦前の西洋教育史研究におけるイエズス会学校紹介，研究の歴史については，高祖敏明「わが国の戦前におけるイエズス会学校紹介，研究史の研究—明治以降出版の西洋教育史書を中心として—」（上智大学『教育学論集』12・13合併号（1978）1979年3月31日 84～112頁）が詳しい。
- (4) 後年，シリングの著書を訳した訳者の岡本良知の序文によると，つぎのように述べている。
「著者ドロテウス・シリング師は今より十五年前本書を著すと直ぐに一本を訳者に恵まれた。其の頃には訳者は本書を訳して刊行しやうといふやうな意志を有ってゐなかつたが，其の二，三年後に教育史を研究してをられる友人武田勤治氏より或る知人に訳させたいとの希望があった。其の請ひにまかせて本書の元来の訳稿が出来たわけである。されば本書の翻訳は，其の知人が主として之をなし，訳者も協力をしたものであるが，故あって知人の名を公にすることの出来ないのを遺憾とする。」（シリング著岡本良知訳『日本に於ける耶蘇会の学校制度』東洋堂 昭和18年3月 1頁）
岡本良知訳が出されて，約1年半後，外山卯三郎によって，同書の訳が出されたのをみると，シリングの著書が，如何に注目されていたか，その一端が分るであろう。
- (5) 例えば，筆者が検討した書物は，つぎの通りである。
 (イ) 大東重善編述『本邦教育史』大日本図書 明治27年11月18日
 (ロ) 育成会編『新編 内外教育史』同文館 明治33年1月5日
 (ハ) 津田元徳著『教育史要 全』金港堂 明治36年5月5日
 (ニ) 佐藤誠実編『修訂 日本教育史』大日本図書 明治36年7月7日
 (ホ) 小泉又一著『教育史 全』大日本図書 明治37年2月28日
 (ヘ) 文部省（白石正邦編）『日本教育史』弘道館 明治43年10月9日
- (6) 高橋は新村と同じく京都帝国大学にいたので，新村の研究成果を知悉していたのであろう。
- (7) 教育学辞典の中で，キリシタン学校に触れたのは，この事典が最初ではない。篠原助市著の『教育学辞典』（宝文館 大正11年5月17日）の中で，「イエイスイタ派は単に欧州のみならず印度，支那，米國を始め，我國にも其の勢力を拡め，肥前の有馬，近江の安土，豊後の府内等にも学校を設けたり。」（22頁）と，簡単ではあるが，触れている。
戦後出版された主な教育学辞典の中で，キリシタン学校の項をみると，『教育学事典 第2巻』（平凡社 昭和30年5月25日）では，それについて少し触れているが，『教育学辞典』（第2巻）（第一法規 昭和53年7月31日）では，全然，触れていない。